様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月１０日現在

機関番号：３２６８１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０１６４
研究課題名（和文）明治期における総合芸術批評の形成

研究課題名（英文）The Formation of Composite Art Criticism in the Meiji Era

研究代表者
白石　美雪（SHIRAISHI　MIYUKI）
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：60298023

研究成果の概要（和文）：明治期において、近代に移入された芸術音楽が芸能や国学と対立しつつ融合していく過程の一端を、新聞における音楽批評の変遷から明らかにした。明治初期に東京日日新聞で福地源一郎が書いた音楽関連の社説は文明開化論の一環としての音楽改良論から出発したが、明治 30 年には技術批評へ移行する兆しをみせる。技術批評を含む新聞批評は明治 20 年代の演劇批評をひな型として、明治 31 年(1898)の読売新聞で確立されたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In Meiji Era, Arts, especially music from Europe got along with traditional arts and Kokugaku, being in the opposition to them. This conclusion became clear with this research on the process of formation of music criticism in newspapers. Fukuchi Genichiro's music criticism in Tokyo-Nichinichi-Shinbun had insisted reform of music for Meiji enlightenment, but changed into technical criticism in Meiji 30. Furthermore this research is to certify that the prototype of music technical criticism was drama criticism in Meiji 20s, and it was established on Yomiuri-Shinbun in Meiji 31(1898).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：総合芸術批評、演奏批評、東京日日新聞、読売新聞、国学

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究は明治に端を発する分化した芸術を統合する批評の形成、さらに批評と文化行政の連関、なかでも音楽と演劇等にかかわる動向を研究する必要を感じたことから発想された。音楽をとりまく広範な批評をめぐっては、東京日日新聞の記事を集成した日本近代洋楽史研究会編『明治期日本人と音楽』全２巻（大空社 1995 年）など資料が整備され、江戸後期から明治期にかけての洋楽受容については中村洪介の『近代日本洋楽史序説』(東京書籍 2003 年)など、幅広く新聞記事や雑誌を手がかりとする研究はすでに行われていたが、批評そのものを分析対象として、「音楽」「美術」「演劇」など

のジャンル概念の導入と定着、さらに先に述べた芸術批評の総合性との関わりに着目した分析は音楽史の分野ではみられなかった。

(2)総合芸術批評が形成される原点の一つとしての国学の有する総合性にも着目した。考証学が対象とする「事実」の多様な広がり、とりわけ先述した小中村清矩の『歌舞音楽略史』などにみられる総合芸術への注目は充分になされていなかった。

(3) 日本の芸能においては幕末から明治前期にかけて、我が国における歌舞伎・人形浄瑠璃・落語・講談といった諸ジャンルが包括的に認識される場合は「歌舞音曲」あるいは「演芸」といった名称が多用され、一方で個別に認識される場合はそれぞれのジャンルごとに独立して記述されることが常だった。西洋文化の流入に伴い「美術」「音楽」「演劇」といった概念が定着するにつれ、上記の諸ジャンルもまた新たな概念によって整理・統合される必要性が認識されることとなったが、具体的に「演芸」と「演劇」のジャンルの判断基準が成立した過程は明らかではなかった。

２．研究の目的

本研究は音楽、演劇、美術など、日本の伝統的なものも西洋から導入されたものも含めた芸術を総合的に把握する「総合芸術」という概念を提示し、「明治期における総合芸術批評の形成」を明らかにすることを目的とする。明治期における芸術各分野における継承と変化のプロセス、新聞雑誌の批評についてはすでに研究のある分野であったが、本研究においては次の比較と総合の視点をもつことで独自の分析を試みる。

(1) 伝統的な芸能と西洋から移入された芸術の対立と共鳴という視点

(2) 近世国学の「考証」の伝統と西洋の美学からの批評の成立という視点

(3) 音楽、演劇、美術などの関係性とその欠落への総合的な視点

３．研究の方法

(1) 本研究は3年間を通じて、専門分野の異なる3名の共同研究者により研究組織を形成して、資料収集や整理をはじめ、月１回程度の研究会を開き、学会発表や学術論文執筆のための共同作業を行った。「総合芸術批評」を対象として、前近代と近代、伝統と近代化、日本と西洋という各種の比較と総合の視点をもってアプローチするために、音楽学、教育史学、演劇学という学問分野、とりわけ近現代音楽史、国学史、歌舞伎研究という分野の研究者による共同研究として実施した。

(2) 導入期の西洋音楽に関連する批評がいつ、どの新聞において、どのような形で登場したのかを概観しながら、明治初期に大きな役割を果たした新聞批評として、日本近代洋楽史研究会編『明治期日本人と音楽』全２巻（大空社 1995 年）を手がかりとしつつ、『東京日日新聞』の音楽記事から批評の対象と語彙の分析を行った。

(3) 技術批評を含む演奏批評の形成過程を明らかにするため、明治 31 年の『読売新聞』の音楽記事から批評の対象と語彙の分析に取り組んだ。さらに明治 20 年代、同紙に掲載された演劇批評との比較、20 年代に刊行された専門雑誌『おむがく』の批評との比較に重点を置いた。

(4) 小中村清矩の『歌舞音楽略史』のほか、江戸歌文派の流れをくんで文部省などでの考証作業に従事した榊原芳野、木村正辞らのうごき、『文芸類纂』などに関係した国学者に関する資料類での芸術批評に注目して資料の収集と分析を進めた。

４．研究成果

(1) 資料整理の結果、大新聞である『東京日日新聞』と小新聞である『読売新聞』においては、音楽批評の萌芽の時期と論調にずれがあることがわかった。『東京日日新聞』では当時の主筆・福地源一郎が書いたとみられる音楽関連の社説が明治８年から明治９年と、明治１７年から退職までの期間に集中していたのに対して、『読売新聞』では明治２０年代になって署名入りの音楽論が現れる。その一方、明治３１年になると、『読売新聞』では演奏会について書かれた署名入りの音楽批評が連載された。これは『東京日日新聞』に先んじていた。

(2) 後掲雑誌論文②において、福地源一郎の音楽関連の社説を読解することによって明治初期の新聞で展開された最初期の音楽評論の性格とその限界が明らかになった。明治初期に『東京日日新聞』の主筆として活躍した福地は 1875 年に初めて三味線音楽の改良を説いて以来、音楽をテーマとした数本の社説を掲載し、晩年にいたるまで音楽関連の論説を書いた。福地の評論は文明開化の推進等の時論に基づいて、歴史的にアプローチしながら、人心を感化する音楽の力を重視する点で一貫している。とくに日本の歌曲を歌詞に依拠して論じたのが特徴で、最初は意味内容の評価に留まっていたが、のちに言葉の音韻や音数の分析へと進んで、歌曲の特徴を提示しているため、初歩的ながら歌曲批評の有効な方法を提示している。福地は音楽を音の流れとして分析的に捉える能力に限界があったと推測され、歌詞を離れた音楽的特徴の

分析はしていないが、そうした制約のなかでも専門書等から知識を補いつつ、社説で音楽を論じ、次の時代の本格的な新聞批評を先駆けたことが明らかになった。

（3）後掲雑誌論文①において、明治 31 年の『読売新聞』に掲載された署名入り音楽関係記事を読解することによって、明治期における「音楽批評」の形成をあとづけた。20 年代の『読売新聞』では、福地源一郎に始まる政治的、道徳的な観点からの音楽改良論のもとで展開されてきた音楽評論が主流を占め、専門雑誌『おむがく』では音楽理論や音楽研究をテーマとする論文が発表されていた。しかし、音楽会での演奏そのものを対象とした「批評」の成立には、外在的な価値観だけでなく、批評家と音楽そのものの間の内在的関係が必要となる。「批評家」自身が音楽の専門知識をもち、演奏家や作曲家の専門性を批評しようとする態度が生まれて初めて、「音楽批評」が成立すると考えられる。

このような認識のもとに、「演奏批評」を意図して計画的に長文で執筆し、さらに「楽評」自体を批評する論考が執筆される段階にいたった明治 31 年の『読売新聞』の音楽批評全 19 点を取り上げ、「批評」、「批評家」という認識、批評家としての姿勢、演奏の評価基準等を分析した。とくに明治 31 年の批評に着目したのは、西洋音楽を含む演奏会の数が格段と増えた年だったことが背景となっている。

同年の執筆者は「明治三十年の音楽界」を書いた会外生、「演奏批評」を書いた神樹生、霞里生、楽石生（伊澤修二）、四谷のちか、なにがし（泉鏡花）、藤村（島崎春樹）、楽評を批評した聰耳庵の８名であった。これらすべての執筆者が知識と経験に基づき、批評のスタイルを意識しながら、音楽批評を自覚的に執筆し、演奏批評の形成に寄与したことが確認できた。

（4）明治 31 年の『読売新聞』で確立された「音楽批評」のスタイルは、明治 20 年代から掲載されてきた定期的な演劇批評、とくに歌舞伎の批評をひな型としている。また、『読売新聞』に先だって、署名入りの「演奏批評」が連載された事例が『毎日新聞』（『横浜毎日新聞』の明治 30 年当時の名称）明治 30 年 12 月に掲載されていた。さらに一般の雑誌では明治 26 年、27 年の『文学界』にあやめ（上田敏）による音楽批評がある。したがって、明治 31 年の『読売新聞』で定着する「音楽批評」のスタイルがどのように形成されたのかについては、今後、さらに調査・研究を進める必要がある。

（5）なお、小中村清矩ら国学者と動向では、研究分担者・高橋陽一が後掲雑誌論文③において、芸術分野を含む文化全般について、近代国家の課題となった学校教育の歴史を海外に向けて万国博覧会において明らかにする必要や海外の百科全書・辞典編纂の影響を受けて、『日本教育史略』、『文芸類纂』、『古事類苑』、『日本教育学』が文部科学省の連続した事業として編纂されていく過程を明らかにした。

また、研究分担者・今岡謙太郎は後掲雑誌論文④、学会発表①、図書②によって当該時期の総合芸術としての批評成立の前提となる演劇分野の動向についての研究を発表した。研究分担者・高橋も後掲雑誌論文③のほか、学会発表②③、図書②によって芸術批評が道徳教育までに至る分野に影響を与える様相を含めて研究を発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①白石美雪、演奏批評・楽評と称する批評の形成―1898（明治 31）年『読売新聞』の音楽批評、国立音楽大学大学院研究年報『音楽研究』、査読有、第 24 輯、2012、17－32
②白石美雪、明治初期の新聞における音楽評論の萌芽―『東京日日新聞』における福地源一郎の社説をめぐって、武蔵野美術大学研究紀要、査読有、第 45 集、2011、47―58
③高橋陽一、日本教育史学の成立と国学―日本教育史略、文芸類纂、古事類苑、日本教育学の関係、明治聖徳記念学会、査読有、復刊第 47 号、2010、104―119
④今岡謙太郎、シンポジウム抄録「楽劇と新作」、『楽劇学』第１７号、2010、

〔学会発表〕（計３件）
①今岡謙太郎、幕末における落語家の東西交流、芸能史研究会東京例会、2011 年 12 月 3 日、法政大学
②高橋陽一、『生命に対する畏敬の念』をどう育てるか、日本道徳教育学会第 78 回大会、2011 年 11 月 20 日、武蔵野大学
③高橋陽一、日本教育史学の成立と国学をめぐって―教育史学史と近代国学の検討に向けて、日本教育史学会、2011 年 2 月 26 日、謙堂文庫

〔図書〕（計２件）
①高橋陽一、武蔵野美術大学出版局、新版道徳教育講義、2012、278
②今岡謙太郎、日本芸術文化振興会（国立劇場）、翻刻・校訂・解題『御家のばけもの』、2021、144

６．研究組織

(1)研究代表者

白石　美雪（SHIRAISHI　MIYUKI）
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：６０２９８０２３

(2)研究分担者

高橋　陽一（TAKAHASHI　YOICHI）
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：７０２９９９５７

今岡　謙太郎（IMAOKA　KENTARO）
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：３０２７７７７７